令和２年度　インターンシップ専門人材セミナー　～基礎編～　パネルディスカッション
タイトル　「リモートインターンシップへの挑戦」
➢モデレーター　京都産業大学　准教授　松高 政 氏
➢パネリスト　下関市立大学学務グループキャリア支援班　上野　惠美　氏
リコージャパン株式会社人材本部人事部採用センター　千葉　理世　氏
東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科３年　舘山　拓正　氏

松高　『パネルディスカッション　リモートインターンシップへの挑戦』を始めさせていただきます。本日進行を務めます、京都産業大学の松高政と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

この夏に、17 大学、15 企業、61 名の学生とともに、リモートインターンシップを実施いたしました。本日は、参加した企業、大学、学生、3 名の方にご登壇をいただきまして、それぞれの立場からのご意見をいろいろお聞きしていこうと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。それでは、自己紹介をお願いいたします。

千葉　私は、リコージャパン株式会社人材本部人事部採用センターの千葉理世と申します。弊社も、今年からリモートでのいろいろな活動、採用活動を行っており、今回参加させていただきました。私は、主に新卒採用を担当しております。どうぞよろしくお願いいたします。

松高　よろしくお願いします。上野さん、お願いいたします。

上野　下関市立大学学務グループキャリア支援班の上野と申します。私自身は、大学職員として入職してから、今年で 14 年目となります。この 14 年間、インターンシップ、PBL を含めたキャリア教育、就職支援の業務を担当しています。本日は、よろしくお願いいたします。

松高　よろしくお願いいたします。舘山くん、お願いします。

舘山　私は、東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科 3 年、舘山拓正と申します。よろしくお願いいたします。

松高　よろしくお願いいたします。まず、最初にお聞きしたい点は、今回なぜ参加したのか、その理由です。ちょうど、このリモートインターンシップの募集をしたのが、7 月末から 8 月頭コロナ禍の真最中で、いろいろ不安なこともあったと思います。その中で、今回参加してみようと思った理由をお聞かせいただけますでしょうか。千葉さんからよろしいですか。

千葉　はい、ありがとうございます。今回参加しようと思った理由は、やはり、今年からリモートでのいろいろな採用活動を行っていく中で、インターンシップもリモート化が求められており、私たちもチャレンジしていきたいところであったためです。今回、全国の学校の皆様と一緒にできるということで、いろいろな学校と交流ができる、学生と交流ができる、そして、学校職員の皆さんからもいろいろアドバイスをいただきながら、何かができそうな企画だというところに魅力を感じ参加をさせていただきました。

松高　ありがとうございます。千葉さん、参加しようかどうか、迷いなどはありませんでしたか？

千葉　そうですね。3 日間でしたので、プログラム的にどうしようかなという迷いはありましたが、どちらかというと、やってみたいという方が強かったです。

松高　そうですか、ありがとうございます。上野さんにお聞きします。多くの大学は、今年の夏、いわゆる対面のインターンシップを中止、もしくは、非常に縮小して実施しているところが多かったと思いますが、そういう状況の中で、今回のリモートインターンシップに参加してみようと思った理由は、どんなところにあったのでしょうか。

上野　本大学から派遣する単位認定のインターンシップは、実は、この緊急事態宣言がかかった後も実施しようとずっと動いておりました。ただ、8 月、9 月の実際のインターンシップ開始時に、感染が拡大していないことを条件にスタートしたので、本当にできるかどうかが非常に不透明な状態でした。そういう中で、CIAC のほうからリモートインターンシップの話が出たので、やはり、3 年生にとっては一生で一度きりの夏休み、その中で、インターンシップでの学びの機会を奪いたくないという思いから、もちろん、対面インターンシップは準備をしながらも、一方では、万が一それができなかったときのためのリモートインターンシップというような気持ちで参加を決めさせていただきました。

松高　参加しようかどうか、迷いはございましたか。

上野　迷いはあまりなかったです。すぐに飛び付いた感じでした。

松高　分かりました。舘山くんもリモートインターンシップは、なんだか、よくわけが分からなかったと思いますが、参加してみようと思ったのはどうしてでしょうか。

舘山　リモートインターンシップに参加してみないかと、職員の方からお声をいただきまして、そこで迷いなく、興味深かったので参加しました。そして、私自身もお話をいただい

たのは7月ごろで、ちょうどそのときは就職活動に対して不安だらけで、少し背を向けていた時期でしたので、リモートインターンシップが何かのきっかけになればよいと思ったからです。リモートインターンシップを通して何かを得ることができればよいと思ったので、今回参加しました。

松高　就職活動にちょっと後ろ向きの時に、このリモートインターンシップをきっかけに何か学んでみたいと、そういう思いですか。舘山くん、実際に参加してみてどうでした？

舘山　参加してみて、やはり慣れない環境で、実家からの参加でしたので疲れてしまい、集中力が続かなかったことをとても後悔しています。しかし、この素晴らしい企画に参加させていただいたのは何かの縁だと思ったので、チャンスをものにしたくて、一つ一つの課題に対してしっかりと意味を持って課題に取組むことができました。またさらに、私のように、来年就職活動を控えている 3 年生の学生のみならず、まだコロナウイルスの影響で学校に通えていない1年生も参加していることに驚き、そういった方々から刺激をもらい、参加してよかったと思いました。

松高　ありがとうございます。千葉さんは、実際に参加して、今振り返ってみていかがですか。

千葉　参加させていただいて、本当によかったなと思っています。先ほど舘山さんからもありましたが、3日間ずっとリモートだと集中力が途切れてしまい、学生たちもちょっと疲れが見えるところもありました。私たちも緊張している部分があり、その中で、いかに、今後、リモートでいろいろな活動をするかということについて、様々な気付きを得られました。こういうふうにプログラムを組んでいくと学生たちが飽きないかな、といったことついて、私たちの方の気付きもありましたし、学生たちもリモートでやることに対してそんなに抵抗なくできるのだ、という発見もありました。

松高　ありがとうございます。上野さんはご参加いただいて、いかがでしたでしょうか。

上野　最初はやはり、対面でできることのほうが多いのではないかと考えていました。実は、リモートインターンシップに対して、少し懐疑的なところがあったというのが正直なところです。ですが、最終的に終わってみて、リモートでも、ものすごく教育的効果の高いプログラムができることを体感することができたというのが、今の正直な気持ちです。学生に対しても、お金や時間、距離を超えて参加できる点が、リモートインターンシップの非常に優れたところではあると思いますが、大学にとっても同じことが言えます。私たちも、実は、対面のインターンシップのときにも、受入れをしていただいている企業のところに、必ず1

回は視察という形で現場に行かせていただいて、学生の様子やプログラムの様子を確認させていただくのですが、このリモートインターンシップの場合は、ちょっと時間が空いているから学生の様子を見に行こうということが、本当に、気軽にできるというのがあって、大学にとっても非常にメリットのある方法だったと、今思っています。

松高　確かにおっしゃるとおり、ちょっと時間が空いたから見に行こうというのは、結構できましたね。

上野　そうですね。

松高　パソコン二つとスマホで、三つぐらい掛持ちで見たりするなど、対面だとなかなかできないようなことが、リモートならではということがあったと思います。
　上野さんは、負担感などはどのぐらいありましたか？今回は、参加する大学の教職員の方にも、随分ご協力をいただきましたが、負担感や大変さは、ありましたでしょうか。

上野　手続き的なところでいうと、本学の対面のインターンシップとの負担感の差は、そんなに大きく変わるものではなかったです。ただ、プログラムの中に大学の教職員も入ってしっかりやらないといけないという点では、改めて、いろいろなことを私自身も考える良いきっかけになりました。最初に、CIAC から「これやってくださいね」とお聞きし、「これやらなきゃ駄目だ」と思ったときに、結構負担に感じました。しかし結果として、私たちがやったことも含めて、学生たちにフィードバックができたと思うので、今振り返ってみると、そんなに負担感はなかったと感じています。

松高　終わった後のアンケートで、企業の方々からも、次から次へとこれやってくれ、あれやってくれという依頼が来て大変でした。正直、今回初めてやったので、やりながら分かってくるっていう部分がかなりありました。やはり、やってみないと分からないことが本当に多く、それが来年につながるという感じがすごくしました。
　千葉さん、御社では、これまでもかなりインターンシップに力を入れてこられたと思いますが、企業側から見て、対面インターンシップとリモートインターンシップで、一番違うところはどの辺でしょうか。

千葉　企業側からすると、先ほど上野さんからもありましたが、地域を超えて様々なところからご参加いただけたということが、とても大きかったのではないかと思います。弊社も、北は宮城から南は広島まで幅広くご参加いただけましたので、いろいろな地域の方たちとの交流ができたことが、まず一つ大きかったと思います。あとは、他社のインターンシップの中身について、私たち企業側は、どんなことをやっているのかあまり知る機会がなく、自

社のプログラムについても、これでいいのかなと、試行錯誤している部分が多かったのですが、今回は、他社とも交流を持てたので、他社がどんなことをやっているのか、どんな困り事を持っているのか、同じ気持ちなのか、などがわかり、接点を持つことができたことが、今までと違うところだったと思います。

松高　それは、参加された企業の、他の会社の方もおっしゃっていました。普段地元の企業の方々とは話をする機会があるのだけれど、そこから離れた企業の方々とお話をする機会はなかなかないので、今回コミュニケーションが取れて、非常に勉強になったという声をアンケートでもたくさんお聞きしました。リモートならではのことだと思います。

千葉　そうですね。リモートの良さかと思いました。

松高　逆に、苦労したこと大変だったことは、何かありますか。

千葉　大変な面ですと、ネットワーク環境が大丈夫かという点、あとは、途中学生の集中力が切れてしまっていないかなどの点です。学生の様子を肌では感じない分、どんな熱量なのかが分かりづらい部分があったので、ちょっと大変でした。

松高　舘山くんはどうでしたか。苦労したことや、大変なことはありましたか。

舘山　大変なことですと、私が参加した企業は個人での作業がメインでしたので、最初の 30 分と最後の 30 分しか、皆さんと顔を合わせることがなかったのです。課題を進めていく上で、分からない時に頼れるものは、メールか電話のみだったのですが、電話やメールする際に失礼があったら嫌だなと、そういうマイナスな気持ちを持ってしまい、質問するのも途中でやめてしまって自己解決する部分が多くありました。そういうマイナスな面をプラスに変えることが大変だったと思います。

松高　企業の方からは、そういう場面でどういう指摘、アドバイス、フィードバックを受けたのですか。

舘山　最終的に一人一人に対して点数化されていました。メールのやりとりの多さや質問を何回してきたかについてもちゃんと点数化してくださいました。私は点数が一番下だったので、質問していかないと本当に先輩からも頼られないし、どんどん見捨てられてしまうよ、といった厳しいお言葉をいただきました。

松高　結構、厳しいことを言われましたね。それは今思うと、何かに生かされていますか。

舘山　今回、体験を発表してほしいというご依頼をいただいたときに、すぐ積極的に返事をしましたので、そういったところに生かされていると思います。本当に、参加してプラスになりました。

松高　確かに、メールの反応が早かったですね。きちんとしたメールも返ってきましたが、それはインターンシップで学んだことですか。

舘山　はい。そこで学びました。

松高　いいですね。上野さん、学生をご覧になっていて、何を一番学んだと感じますか。

上野　いろいろ学んだと思いますが、本学の場合は、経済学部単科大学なので、インターンシップの場においても、理系の学生や、芸術系の学生等と、なかなか接する機会がない面があります。その中で、学内で学生同士が話していると、同じ学問を学んでいるので、自分の専門性を認識する機会が少ないように感じているのですが、他大学、他学部の学生と話すことによって、自分の専門性を意識する瞬間があったようです。それにより、学習に対する意欲の向上というところで非常に大きかったと感じています。あと、千葉さんがおっしゃったように、通常では出会えないエリアの企業の方々や、大学の学生たちとつながることができたということも、田舎の地方の大学ですので、非常に刺激が大きかったと感じています。インターンシップという視点でいうと、先ほど、舘山さんがおっしゃったように、ビジネスの場において甘えてはいけない部分を、しっかり企業の方にフィードバックしていただいたり、時には厳しいお言葉もいただいたりして、社会の厳しさや仕事に対しての意識について、随分、身に付けることができたのではないかと思っています。

松高　学生には、どのような課題に取組ませましたか。

千葉　学生には、弊社がいろいろ行っている事業の中から、一つ興味を持った事例を調べて、それを周りの人たちに発表してくださいという課題を出しました、その他大きな事例としては、弊社は今ちょうど、OA 機器メーカーというイメージからデジタルサービスの会社に移行している部分があるので、その中で「私たちができることはどんなことだろう」ということを、学生の目線から私たちにプレゼンしてくださいという、結構壮大なテーマでの課題を出しました。弊社のことをよく調べていただいた上で、私たちがこんなこともできるのではないかというプレゼンを、最後にまとめてくれました。

松高　学生から出てきたものをご覧になっていかがでしたか。

千葉　私たちの想像以上といいますか、最初、1日目にテーマを渡してワークをしたときには、話がまとまるかなという不安もあったのですが、最終日にしっかりとまとめてくれました。私たちが当たり前だと思っていたことが学生たちには新鮮に見えること等を改めて実感しながら、こういう良さもあるのだなと、私たちも改めて会社の良さを知ることができて、かなり刺激を受けました。

松高　今回、ご参加いただいた大学の担当者の方は、今日この動画をご覧になっている方々もそうだと思いますが、JASSOのインターンシップ専門人材セミナーと、CIACのインターンシップ専門人材研修会、ステップ1、2、3を受けた方々、修了された方々です。その方々にはインターンシップコーディネーターという名称でご活躍をいただいています。今回、ご参加いただいた大学の担当者は、全てそのコーディネーターの方々です。私が思うに、今回、このプログラムは、本当にチャレンジングだったと思いますが、うまくいった最大の理由は、そのコーディネーターの方々と一緒にやったということ、それなくしてあり得ないと思うのです。先ほどのお話にもありましたとおり、次から次へと、「これやらなくちゃいけない」「あれやらなくちゃいけない」ということが出てくるわけです。企業の方との調整、学生との調整、いろいろなことをうまくさばいていただいたのがコーディネーターの方々だったのです。

上野さんもそのコーディネーターとしてご参加いただいたのですが、そういうメンバーと一緒にやってみて、お感じになったこと、あるいは、そういうメンバーと一緒にできたからうまくいったというようなことは、どんな辺りに感じられますか。

上野　今、松高先生がおっしゃったように、単純に企業と学生をマッチングするだけという形で今回のリモートインターンシップを運営していたとしたら、ここまで満足度が本当に高かっただろうかと、今振り返って思います。日ごろから、教育的効果の高いインターンシッププログラムとはどういうものかという視点や、自分の大学の理念、学部の専門性といった点、そういう部分とインターンシッププログラムをどのようにつなげていくかというところに、常にアンテナを立てて学んでいる仲間だったからこそ、今回のようなインターンシップが成功したのではないかと思っています。

裏話ですが、実は打合せの時間もそれほど多かったわけではなく、松高先生からメールで、これやっといてね、と連絡が来るような感じでした。我々の中では、先生から指示が飛んできたときに、「これってどういう意図を持ってやったらいいのだろう」と考えながら運営していました。そういったところから、コーディネーター側が自然と向いている方向が同じだったところが大きかったかと思います。今回、各大学が参加するにあたって、企業を1社ピックアップして一緒に参加するということだったのですが、その企業を選定するときも、今回のこの目的にふさわしい企業はどこの企業なのだろうと考え、そこの企業に企画を持ち

込んでその担当者を口説いて、その企業と大学から派遣する学生とがゴールを共有して、大学職員がずっと伴走しながら最後まで駆抜けることができたという点、やはり、これが成功の秘訣だったのではないかと思います。

松高　おっしゃるとおりですね。ご参加いただいた企業もフリーでご参加いただいたのではなくて、必ず参加する大学が、この企業が良いということでお誘いしてご参加いただいたので、本当にどの企業も問題意識が高かったと思います。3 日間の就業体験プログラムのために、こんなに緻密にプログラムを作っていただけるなんて、素晴らしいなと思いました。

千葉さんも、恐らくこれまでのインターンシップ生は、御社に興味があり、関心がある学生がきていたと思いますが、今回、学生はこちらでシャッフルをして、学生の希望を聞かずに自動的に振り分けたので、もしかすると、リコージャパンを知らない学生も来ていたのではないかと思います。そのような学生を受入れてみていかがでしたか。

千葉　今までですと、弊社に何かしら興味を持っていたり、イメージしていたりする学生が多かったので、私たちが提示した課題も、結構理解しやすかったと思います。しかし、今回は本当にシャッフルで、弊社に全く興味がなかった学生も中にはいたと思うので、逆に、私たちのことをフラットに見てくれました。プログラムに対して面白かったのか、興味を持てたのかなど、いろいろな意見を聞けました。私たちも、こういうプログラムだと学生たちは取組みやすいのだな、この辺はちょっと飽きちゃうのだな、といったようなことがよく分かりました。

松高　本当にそうですね。確か、私のゼミの学生も 1 人、千葉さんのところに伺ったかと思いますが、全く興味がなかったと思います。ただ、これがご縁で興味も出てきたことでしょう。本当に、学生の希望、興味、関心に捉われずインターンシップに行かせるということも、新しい出会いということで、すごく意味があると感じます。

舘山くんは京都のワタキューセイモアでしたね。多分、希望していたわけではないと思いますが、そこに割り振られたときの感想はいかがでしたか。

舘山　割り振られた時の第一印象は、何の会社だろう、どこにあるのだろう、という感じで、何をするのだろうと、不安しかなかったです。

松高　そういう会社があるのは、知らなかったですよね。

舘山　はい。今回の課題は、企業説明会で配るチラシ作りというのがメインでしたので、その会社を知らないとそういうチラシも作れないですし、今後、自分が就職活動をする番になったとき、企業研究などが必要になったら、こういう手順で企業研究していけばいいのだな、

ということを少し考えるようになり、そういった企業研究の仕方を学べたと思います。

松高　舘山くんが行ったワタキューセイモアという会社は、京都産業大学がお願いして参加していただいた会社で、私はその担当者の方とも、非常によくコミュニケーションを取っています。今回、舘山くんが、たまたま、その会社に行ったというので、どんな感じでしたかと聞いたら、参加する前までは自信を持って来ていたのだけれど、参加後にその自信が崩れ去って、本人からすると少し辛かったのではないかという、コメントをされていました。実際にどうでしたか。

舘山　はい。私は、個人での作業より皆で作業したく、その方が自分に向いているということが分かっていました。こういう個人での作業となると、頼れるものはメールか電話しかなくて、どうしようと思っていたら、そこからどんどん内気になってしまい、質問することもできなくなりました。そこを今でも後悔しています。振り返った時に、あの時質問しておけばよかった、ということばかり考えていました。質問をすることで、もっと良い課題達成ができたのではないかと、今でも思います。自信を持つことは大切だなと実感しました。

松高　リモートインターンシップだと、企業側から連絡するより学生側から連絡する方が難しいと思うので、企業側が心配して、大丈夫？困っていない？と優しい手を差し伸べる必要もあるかと思いますが、何か心がけなどありますか。

千葉　そうですね。学生たちは一生懸命になりすぎてしまって、休憩する時間等を多めに取るように「少し休憩していいよ」などの声掛けはしました。なるべく、オンラインでつなぐようにはしていたので、状況は分かるようにしながら、何かあったらすぐに声を掛けられるような体制を取っていました。

松高　今回は、大学側もしっかり関わってサポートをしていたつもりですが、上野さん、学生が不安な状況になっているのではないかなど、我々からすると、少し心配な部分があったと思います。手を差し伸べたり、サポートしたり、少し気を使った部分もあったと思います。その辺、特に意識されたことはございますか。

上野　そうですね。Zoom 等を使って通常の就業体験を行い、それと別に今回は Slack で、全企業、学生、職員がつながっていたのですが、実は、それにプラスアルファして、本学独自に Google Classroom も開けて、連絡を密に取っていました。何か質問があれば、夜中でもすぐ携帯のほうに連絡が入ってくるので、企業に相談しづらいこと、聞きにくいところはそこで聞けるように、バックアップ体制を整えていました。結果としては、それがあまりにもお節介すぎたという反省も若干ありますが、今回オンラインが初めてだったので、そうい

うバックアップ体制も大学として取ることを意識していました。やってみてメンタルが辛い等と言ってきた学生はおらず、問題はなかったのですが、来年やるときにはそこまでせずともいけるかもしれないという自信にはなりました。今回は、このような形で独自のセーフティーネットを用意していました。

松高　舘山くんも、東北福祉大学の職員の方々に、随分サポートしていただいたのではないかと思いますが、結構、頼ったりしましたか。

舘山　何か困ったことがあったらすぐ連絡できるサポート体制があって、今回、参加した同じ大学の学生と集まって、定期的に意見交換をしたりしていました。

松高　確かに、今回は 17 大学が参加したので、各大学からすると、自分の大学の学生が迷惑を掛けたら非常に申し訳ないということから、その辺りケアされていましたよね。

上野　そうですね。

松高　本当のプログラム、裏のプログラム、共に充実していたような気がします。上野さんがおっしゃられたように、確かに、私も見ていて、ここは学生に自分で解決させなければいけないポイントだろうというところでも、大学側が企業のほうに問い合わせをしたりして、セーフティーネットを必要以上に張っていた感じがするので、その辺は来年の課題として、もう少し学生に任せてもいいかなという感じがする部分ではありました。
　千葉さん、今回は大学側が結構がっちり関わっていたと思いますが、その辺りはいかがでしたか。例えば、大学の教職員が就業期間中に見に来たり、最終報告会も見に来たり、結構、出入りしていたかと思いますが、何かお感じになったことはございますか。

千葉　これまでも、学校に関わっていただいたことはありましたが、ここまでしっかり入っていただいたことはありませんでした。むしろ、私たちはウエルカムなので、もっとアドバイスをしていただいたり、こういったことをやらせてほしいという要望があったりしたら、もっと言ってもらえると良いなと思いました。大学や学生達はどういうことを求めているのか、しっかりと分かった上で進められたのは、とてもよかったと思っています。

松高　上野さんも今回は大学がかなり関わっていたかと思いますが、今まではあまり関わっていなかったかと思います。上野さんのところは違うかもしれませんが、大方の大学は、就業期間中になると、企業に丸投げみたいなところがあり、実際、学生が何をしているのか分からないケースが多かったと思います。今回はかなり、大学側がぐいぐい入っていったプログラムだったと思いますが、そういった企業との組み方についてはいかがでしょうか。

上野　企業のほうが完璧にプログラムを組んでくだされば、それはそれで、一つの方法だと思います。今回、実は私たちが声を掛けさせていただいた企業も、リモートインターンシップ自体が、そもそも初めての取組ということだったので、どんなプログラムをやったら良いのかという相談から入っていけたというところがありました。学生の特性はこうだから、こんなふうにやったらどうですか、こんなことを学生にやらせたいけれどこれはハードルが高いだろうか、そんな相談をしながらある程度プログラムを作っていけたところは、面白かったと思っています。

松高　今回、確かにリモートインターンシップを初めてやるという企業が多かったと思います。その課題をどうするかという点に、随分悩まれていましたが、各大学と一緒に課題を作り上げた感じがありますね。私も、先ほどのワタキューセイモアの担当者の方とは「こんな課題でどうでしょうか」等と何度かやりとりをして行くうちに、いいものが出来上がってきました。それがそれぞれのところで展開されていた、まさに、インターンシップコーディネーターの方々の力量発揮という場面だったと思います。

千葉さんのところは、湘北短期大学からのお声がけでしたね。湘北短期大学とのやりとりでも、今のようなことがあったのでしょうか。

千葉　事前に、こんな内容でいきたいのですがどうでしょうかということをお伺いしながら、アドバイスをいただき進められたと思います。これまでも、湘北短期大学の方から、直接、弊社の神奈川支社でのインターンシップにお越しいただいたこともあり、内容等はなんとなくご理解いただいていた部分もあったので、それをリモートに置き換えたときに、大丈夫かな、といった点もアドバイスをいただきながら進められたかと思います。

松高　来年以降のインターンシップの方向性みたいなものは、千葉さんはどのようにお考えになっていますか。

千葉　弊社も各都道府県に勤務地があり、それぞれで採用活動やインターンシップ受入をしたいけれど、なかなかできないといった悩みを抱える担当がいます。リモートの良さというのは、やはり地域に関係なくできるところですので、リモートで一緒にできる部分は私の方でやり、直接現場を体験したり、同行や実際の働く姿を見てもらったりするところは、各地でできれば良いと思います。リモートと対面のハイブリッド型で、それぞれの良い面を活かしながら、より良いプログラム作れたらと思っています。

松高　どちらか一方というよりも、良いところを組合せたハイブリッドということですね。大学関係者は来年のインターンシップについて、今、悩んでいるところだと思いますが、上野さんのところは、来年どうされる予定ですか。

上野　本学は、かれこれ 20 年近く、大学派遣で対面のインターンシップをやってきたので、それはそれでやりたいと思っています。やはり、リモートインターンシップもとても素敵なプログラムではあるのですが、どうしても、社会人の背中を見て、実際にどのような仕事ぶりなのか、電話対応の時にどのような敬語を使っているのか、上司と部下はどのように会話をしているのかというのは、やはり、現場に行かないと、なかなか体験できないと思います。リモートインターンシップでは、自然と目に入ってきて感じるということは難しいとは思いますので、対面も大切にしたいと思っています。しかし、地方の学生にとってインターンシップで何が一番大変かというと、移動距離の部分、費用の部分、それから、そこに行くと時間をとられてしまうという部分が大きなハンディになっています。リモートインターンシップであれば、その辺があっという間に解決できます。今回、リモートインターンシップの素晴らしさを知ってしまったので、ハイブリッドでの合せ技でやるか、もしくは、それぞれ、対面型が良い学生、リモートが良い学生という形で、併用しながらやっていくということを考えているところです。

松高　今回のリモートインターンシップは、複数の大学、複数の企業でやったことが、非常に大きかったと思います。これを単独の大学、単独の企業でやると、また違う課題がいろいろ出てくるような気がします。例えば、企業側からすると、企業単独でやった場合に、いろいろな大学から学生が来ると、モチベーションの違い等がでてきます。事前研修をしっかり受けてきた学生もいれば、全く何もしてこなかった学生もいる。対面であると、臨機応変に対応できるかと思いますが、リモートだとそれがなかなか難しいですね。大事故が起こるような気がしますが、もし企業単独でやる場合はいかがでしょうか。

千葉　弊社だけでやるのは、結構、厳しい部分があると思います。今も、ワンデー仕事体験等は、いろいろな学生さんウエルカムで来ています。数時間なので問題なくできていると思いますが、複数日程であると、情報漏えいのリスク管理はどうすれば良いか等、いろいろ考える必要があるかと思います。学校単体で受けたときにも、学校によって、課題フォームが一つ違ったり、目的が一つ違ったりすると、それに合わせてのプログラム全体を統一することができるのか等、かなり難しい部分があるのではないかと思います。

松高　今年の夏に実施したリモートインターンシップで、企業対象のアンケートでは、ワンデーはいわゆる、会社説明会的な内容で終わりましたという回答が多かったです。企業側からしてみると、ワンデーの会社説明会で、それをインターンシップと呼ぶのか、けしからん

という話ではなく、恐らく、そうならざるを得なかったのではないかと思います。

千葉　そうですね。それプラス、弊社の場合は、ワークをして、自分で考える力を身に付けてもらいたいというのはありますが、果たして、学生にどこまで理解してもらえたのか、分からない部分もたくさんありました。手軽なだけに、どれだけ興味を持ってもらえたのかが、ちょっと分かりづらかったと思います。

松高　今回、61 名の学生が参加しましたが、途中で抜けちゃう学生もいませんでしたし、事前学習も遅刻してくる学生はいなかったと思います。同じ事前学習を受けて、意識レベルはかなり統一されていて、その後各社に散らばったので、ばらつきがなかったのは非常に大きかったです。企業側からクレーム的なものも、一つもありませんでしたし、すごくやりやすかったと思います。これを企業単独でやるとなると、ちょっと想像しただけでも、なかなか大変だなと思います。マインドセットで終わってしまう可能性もありますね。

千葉　マインドセットというか、自分の目的は何かというところからしっかりやっていかないと難しいだろうなと思います。今回はその目的を、きちんと共有できていたので、学生も私たちが考えていたプログラムにすんなり入り込みましたし、その辺はありがたかったです。

松高　舘山くんは、他の学生と 61 人で事前学習やグループワークをやってみてどうでしたか。

舘山　一人一人目指している将来像が違うのでずが、皆さん、考え方をしっかり持っていたし、個性的だと思いました。事前学習のときに何回もグループ分けがされて、意見を交換する時間がありました。私は、意見を外に発信せず、自分の中で閉じ込めて、周りの意見に同意することが多かったのですが、1 年生、2 年生でも、学年関係なく、意見を発信していて、意見を発信しない人は、社会の中では埋もれていくのだなということを強く感じました。意見を言うことで人の心を動かしたり、自分との相違点を共有することができたりするから、意見もちゃんと言うときには言った方が良いと思いました。皆さん、しっかり意見を持っていて、事前学習でも感銘を受けました。

松高　そうですか。上野さん、大学が単独でリモートインターンシップをやると、いろいろ課題があると思いますが、その辺はどうお考えになっていますか。

上野　やはり大変だと思います。今回のプログラムですごく良かったのは、学生の事前学習というのもありますが、企業に対しても、事前オリエンテーションを、松高先生が企画して

くださいました。担当者一人一人の目線をそろえる機会があったのも、非常に大きかったと思っています。インターンシップの初日に、1 回あたり 5〜6 社と、そこに参加する学生が集まって、企業の担当者の方から、それぞれ『自分にとって「働く」とはなにか』というテーマの話を聞けたのも、学生にとっては良かったです。一つの会社の一人の担当者の意見だけではなく、いろいろな業界の、いろいろな社会人の働くことの意義を聞けたことは、非常に大きかったと思います。一堂に会して、こういう取組ができたのは、リモートインターンシップの醍醐味で、これがあったからこそ成功したと思っています。これを、例えば、東京や大阪で集まりましょう、となるとできなかったのではないでしょうか。こういう取組も、今回、満足度、教育的効果が高かった一つだと思っています。単独の大学でこれだけのプログラム、これだけの企業を集めることは無理だと思うので、複数大学、複数企業が結集する力の大きさを、改めて実感しているところであります。

松高　おっしゃるとおり、確かに、目線合わせは大事ですね。学生もそうですが、正直、企業の方もいろいろな目的意識で来るところが多いので、そこをどのように合わせていくかを、今回、意識したつもりです。それを単独の企業、大学でやるとなると、目線合わせで終わってしまう感じがしますね。

　千葉さん、今回は、上野さんがおっしゃられたように、企業だけの事前・事後オリエンテーションをやりました。そこで、働くこと、仕事のこと等、いろいろ考えさせて、こんなことまでさせられるのか、と思った部分もあったかと思いますが、その辺りはいかがでしたか。

千葉　改めて自分のキャリアを考えたり、他社の方がコロナ禍でどのように動かれているのかを知れたり、働く上でのいろいろなことを考える良いきっかけになりました。改めてインターンシップとは、そういうことを伝える場だということも実感しました。このリモートインターンシップをやるにあたり、学生が働く中で、今後どのような社会人生活を送っていくのかと、そんなことも意識しながら対応できたかと思います。とても良いきっかけをいただいたと思います。

松高　舘山くんは、就業実習をした会社以外の社員の方の「働くとは、仕事とは、これからどのように職業人生を送っていきたいのか」という話を、いろいろ聞いてどうでしたか。例えば、自分の就職活動や進路選択に、何か影響があったり、考える材料になったりしましたか。

舘山　一人一人が同じ意見ではないと思いましたし、今でも、何を参考にすればいいか、何が正解なのか、間違いなのかも分からないです。就職活動に向けて動いていくときに、全ての意見を取り入れるのではなく、いろいろな人の意見にしっかりと耳を傾けて、こういう人もいたなと思い返せるようにして、企業の方から聞いたことを生かせていけたらいいなと

思います。

松高　就業実習の初日に、社員の方から10分間で、働くとは何なのか、生き方をどう考えるのか、これからどのように働いていくのか、ということをお話いただきました。私は 15名全員のお話を伺い、とても学ぶことが多かったです。私は、あれを全部動画にするだけでも、今回のリモートインターンシップは十分価値がある、これで終わりにしても良いのではないかと思ったくらい、学生にとっても得ることがあったと思います。学生が前のめりで聞いているのが、本当に伝わってきました。企業の方も一生懸命考えて準備をされてきたことが手に取るようにわかりました。千葉さんも、かなり準備してお話しされたのではないですか。

千葉　ある程度、原稿を作り、これまでの経験等を棚卸しする良い機会になりました。

松高　千葉さん、他の社員の方にも同じ経験をしてほしいとおっしゃっていましたが、働いていく上で、ああいうことを考えるのは大事なことでしょうか。

千葉　そうですね。仕事をしていく中で、その時その時で、ちょっと辛くて投げ出したくなってしまうときもあると思います。改めて、なぜ続けているのだろう、何のために働いているのだろうかと考えると、自分のやる気にもつながったりします。その辺をしっかり伝えられれば、学生にも、当社に入るだけではなく、もっと良く人生を歩んでもらうための参考になれば良いと思いました。

松高　上野さんも、社員の方が一生懸命お話しされているのをお聞きになって、いかがでしたか。

上野　十人十色ではないですが、いろいろな方向から働くということを捉えていらっしゃる方がいて、それはそれで、学生にとっても、すごく実りの多い時間だったのではないかと思います。ご自分の状態が良いときばかりではなく、辛かった時にどのようなことを考えて踏ん張ったかというようなお話をお聞きして、ああいうお話は普通なかなか出てこないと思いました。社会人は、どうしても、かっこつけたくなったりするのですが、今回、本当にあけっぴろげで素直に学生にお話しいただいて、私自身も、うっとくるところがあったりと、非常に、社会人としてもとても良い、豊かなお話だと感じました。

松高　本当にそうですね。このコロナ禍の影響を、もろに受けた食品関係、飲食関係の方もご参加されていて、大変な中で頑張ったという力強さとでも言いましょうか、我々もそれを感じたわけですから、学生も本当に感じたのではないかと思います。

千葉　リモートという、選択肢が増えたと私は思っています。今までやりたかったけれどなかなかできなかった部分を、急にこういう世の中になって、当社でも選択肢の一つとしてやるようになりました。その中で良い部分もたくさん見えてきていますし、全国のいろいろな方々とのコミュニケーションがすごく取りやすくなりました。そういったことを体験してみないと、抵抗してしまう部分もたくさんあります。最初は、当社でも、面接をウェブでやるにもかなり抵抗がありましたが、やってみると意外と便利だね、対面とそんなに変わらずにできるねとなりました。やってみる一つのきっかけになれば、やる企業も増えるでしょうし、その中で、違うなと思えば、選択肢から外せば良いと思います。

松高　上野さんの大学は地方にあたると思いますが、学生の思考は変わりましたか。例えば、東京の会社でもリモートだったら働けるわけですが、今までは選択肢に入ってこなかったような会社が、今後入ってくる可能性はあると思いますか。

上野　本学は、もともと 3 割が東京の企業に就職するので、都会志向が強い学生もいます。一方で、地元から離れたくない、絶対に地元が良いという学生の層もいて、そういう学生は、地元にいるイコール地元の企業に就職するという選択肢しかなかったのですが、もし、地方にいてもリモートで仕事ができる、月、年に何回か出社してくれれば良いという働き方が選択できるとすれば、学生側の職業選択の幅も大きく広がっていきます。反対にいうと、非常に良い学生、何を持って良い学生かというのはあるのですが、優秀なのでもっと羽ばたいてほしいと思っているけれど、いや、地元にという学生などは、活躍できる場が広がり、もっと大きく世の中を見ても良いのではないかと言えるようになるので、働き方の一つとして選択肢が増えるのは、企業にとっても、学生にとっても、大きなメリットだと思います。

松高　やはり、世の中が変わっていくでしょうし、学生も企業も我々も大学も、それにどう対応していくのかが、きっと今問われているのではないかと思います。

　これでパネルディスカッションは終了いたします。今後のインターンシップを考える上で、少しでも参考にしていただければ、幸いでございます。本日は、ありがとうございました。

（了）